

タブレット端末がつなぐ、日本とインドネシア

金沢市立小坂小学校 教諭 山口 眞希

キーワード：タブレット端末、協働学習、国際交流

1. はじめに

本校6年生の総合的な学習の時間のテーマは「生きる」。「国際社会に生きる」を中心テーマに、遠く離れた地球で同じ時間を生きている同年代の子どもたちと関わる活動を通して、世界を身近に感じ、世界の一員としての自覚を持って歩んでほしいと考えた。そこで、インドネシアの交流校と協働で絵を制作することをゴールにした学習を設定した（アートマイルプロジェクトに協力依頼）。国際協働学習に加え「地域に生きる」として、地域や市に伝わる歴史跡や名所を訪ねたり、文化を調べたりしてそのよさをインドネシアの友達に伝える活動も設定した。顔の見える相手がいる活動は、他国の文化や考え方を知りたいという思いを生むと同時に、自分のことや日本の文化を知ってほしいという強い相手意識も生む。その点で価値のある学習だと考えた。

2. ねらい

本単元のねらいは「国際協働学習を通して、インドネシアについて理解を深めると同時に、自国の文化の良さを再認識することができる」ことである。調べたまた、この学習では調べたことをまとめたり発表したりする際に、4人グループでの協働学習の形をとった。協働学習の過程において「考えの根拠を明確に伝える」「互いの考えの共通点や相違点を吟味する」「互いの良さを受け入れて新しい価値を創造する」「合意形成をはかる」という思考活動が繰り返されることで、関わり合って学ぶ力が身に付くことを期待した。

3. 実践内容

3.1 授業設計の視点

児童が相手意識を高め、主体的に学習できるように、タブレット端末を使った制作活動や交流活動を組み込んだ単元を構成する。

また、友達同士で知恵を出し合いながら学習を進められるような学習展開を工夫する。

3.2 学習の流れ

月	学習内容
5	学習の見通しを持つ
6	インドネシアについて調べる（テーマ別）
7	インドネシア情報交換会を開く
9	自己紹介カードを作成し交換 100人村ワークショップで世界の現状を知る
10	地域の史跡や文化を調べ、紹介ビデオを作成
11	壁画のテーマや構図を相手校と相談する
12	壁画の作成・送付
1	壁画の受け取り
2	学習のまとめと振り返り

3.3 主体的な学習をめざして

ゴールの活動に向け、「スカイプを使ったテレビ会

議で自己紹介や特技披露、校歌の紹介をし合う」「相手国のことを調べてデジタルリーフレットにまとめ、クラス内で情報交換会を開く」「動画共有サイトに、自分の国の良さや文化を英語で紹介するPR動画を作成し、アップする」「絵のデザインをどうするか、メールおよびスカイプで相談する」という学習を行った。

上記の全員で行う活動の他に、子どもたちは「デザインプロジェクト（絵のデザイン、下絵をリード）」「コミュニケーションプロジェクト（毎日のメールチェック、ソフトを使って翻訳、クラスに紹介）」「情報プロジェクト（インドネシアミニ情報を調べてクラスに紹介）」「学校紹介プロジェクト（自分の学校を紹介する動画を作成）」のどれかのチームに所属し、自分たちで総意工夫をしながら主体的に活動できるようにした。

4. ICTの活用

本単元でタブレット端末を使う意図は、意欲を高めること以外にも以下の点において有益であると考えたからである。

- ・操作性が容易であるため、操作方法に戸惑うことなく、内容吟味に時間をさけること
- ・all-in-oneであり、動画の撮影から音声の録音、画面編集まで一台で完結できること
- ・持ち運びができるため、静かな場所に持って行って録音・録画ができること
- ・写真や動画を挿入することができるので、相手の理解を得るために最適な表現方法を考えながら学習できること
- ・Wi-Fi につなげば、スカイプを使ってインターネット経由の電子会議が可能になること

タブレット端末を活用した場面の様子を中心に以下に説明する。

4.1 デジタルリーフレットの作成・プレゼン

この活動のねらいはインドネシアについて知ることである。子どもたちが調べたいテーマ別（基本情報・学校生活・流行・スポーツ・食文化・名所・生活・歴史）にグループを作り、インターネットや図書資料を活用してテーマについて調べた。調べた情報をもとに、iPad 用表現活動支援アプリ「E-REPORT（スズキ教育ソフト）」を使って、タブレット端末でデジタルリーフレットを作成（写真1）。作成したリーフレットを電子黒板に大きく写してプレゼンをし、情報交換した。デジタルリーフレットの良さは写真や動画を簡単にいられることである。インドネシアで流行しているスポーツや遊びの動画を貼り付けてみんなに紹介することで、理解が深まった。

この学習は協働の形式ではあるが、一人一人が情報を収集して持ち寄り・一人一人がリーフレットのラフスケッチを描いて持ち寄りというように、個人で思考するプロセスも大切にしたい。そうすることで活動に対

する主体性が生まれ、個々の学習意欲を高めることにつながった。



写真 1 デジタルリーフレットの一部

4. 2 タブレット端末で金沢紹介動画作成

インドネシアについて調べた後、「日本のことを知ってもらいたい!」との声があがったので、日本の文化や良いところを紹介するPR動画をiPadで作成することにした。スライドショー作成アプリ「ロイロノート(loilo社)」を使い、何を紹介するか、どう伝えたらわかってもらえるかを考えてシナリオを書いた。説明する文章は星稜大学の学生さんに英訳をお願いした。丁寧に読み方も教えてくださったおかげでスムーズに練習できた。

紹介したいものは実際に持ってきて見せたり、持っていない場合は写真を見せたりした。音声だけで伝わりにくいところはテロップ(英語)もいれて、相手がわかるように工夫をしていた。できた動画は非公開の動画共有サイトにアップして交流校に見てもらい、感想をメールで送ってもらうことができた(写真2)



写真 2 和菓子を紹介する動画

4. 3 スカイクを使って直接交流

タブレット端末に入っているスカイクというテレビ電話アプリを使って、インドネシアの学校と直接交流をした。児童はこの日のために、英語での自己紹介や特技披露の練習を繰り返した。壁画デザインチームは壁画のデザインを提案するための英語を、英語インストラクターから習って練習した。特技披露では、例えば野球が特技の児童はユニフォーム着用、空手が趣味の児童は道義を着て技を披露、絵が得意な児童は絵を見せるなど、交流校の友達が少しでもわかりやすいように工夫を凝らしていた。

スカイク画面は電子黒板につないで大型モニターで見られるようにした。自分たちの紹介への交流校の反応が大きく、また「Hi!○○」と名前も復唱してくれて、児童は「英語が伝わった喜び」も感じていた。

顔を見て直接話したことで、互いの違いや共通点に気づいたり、協働で絵を制作するというゴールに向け

ての意欲が高まったりした(写真3)。



写真 3 スカイクで交流

児童の振り返りの内容は以下の通りである。

- ・Skype 会議をして、とても緊張したけど自分の名前を呼んでくれてうれしかった。
- ・反応を返してくれるので「通じているんだ!」と思ってとてもうれしくなった。
- ・ブタン4の子達は明るくて元気いっぱいだった。校歌も日本のものと全然違ってびっくりした。タブレット端末がなければ、これほど手軽に交流できなかったであろう。機器や回線、カメラの準備と接続等もっと煩雑になっていた。タブレット端末の活用は、インターネットを通じての交流におおいに有用性があると感じた。

5. 実践の成果

単元終了後にとった質問紙調査では「意欲を持って活動できたか」の質問に対し全員が肯定的評価をした。また「どの活動が心に残っているか」の質問に対しては「スカイクで会議をしたこと」と回答した児童が最も多かった。直接顔を見て会話をすることは、児童にとって意義のある活動であったと考えられる。

記述式の振り返りを見ると、「国際交流をしてよかった」という記述がすべての児童に見られた。その理由として「自分たちと違う習慣を知れて楽しかった」「英語が通じたことや反応してくれたことがうれしかった」「日本の紹介動画にワンドフル!と返事が返ってきてうれしかった」「インドネシアが好きになった。行ってみたい」「もっと日本のことを知ってもらいたい」「仲良くなった国と戦争をしたくないと感じた」などの声があがった。また、「他の国とも交流したい」「他の国のことを知りたい」という記述も多かった。

プロジェクト・チームを組んだことで、教師を頼りがちだった子どもたちが、自分たちでアイデアを出し、進んで行動する姿が見られるようになり、成長を感じた。また、大学生が関わってくれたことで、地域の学校同士の協力体制がさらに強くなった。

6. 今後に向けて

タブレット端末を活用することで、海外の友達とも、複雑な配線や準備なしにリアルタイムで会話ができる。オールインワンのタブレット端末を活用すると動画も簡単に作成でき、インターネット上で共有することができる。本単元は国際交流でタブレット端末を活用して授業設計をしたが、この活用の仕方は、国内の地域間交流や学校間交流にも生かせるであろう。タブレット端末は、離れたところにいる人々との交流学習における活用が今後ますます期待できるツールである。今後も有益な活用方法を考え実践していきたい。